

GOODBYE WORLD

BY SUKETU MEHTA

Categories of Indian Thought

NAMARŪPA

ISSUE N° 4

LEGENDS & LEGACIES

B.K.S. IYENGAR & K. PATTABHI JOIS

REUNION PHOTOS MIKE HILL

THE NEXT GENERATION

ALEX MEDIN INTERVIEWS PRASHANT IYENGAR,
KAUSTHUB DESIKACHAR & SHARATH RANGASWAMY



US \$10.00 CAN \$13.95
DISPLAY UNTIL JUNE 06
www.namarupa.org

PHOTOS MARTIN BRADING,
DAVID T. HANSON & SHAWN LAKSMI
NAVA RATRI DR. ROBERT E. SVOBODA
NYASA & MUDRA SRIRAMA RAMANUJA ACHARI

LEGENDS & LEGACIES

伝説と遺産

写真: マイク・ヒル

会話翻訳: スナード・ラグラム

この記事は NAMATUPA issue no.4 に掲載されたものです。NAMARUPA 共同発行人であるエディ・スターンおよびロバート・モーゼスの同意のもと翻訳・配布しています。

日本語翻訳: 宮村 葉



1934年、当時まだ若者だったK・パッタビ・ジョイスとB・K・S・アイアンガー。2人はともに、非常に厳しく、そしてその後伝説的なヨギとして知られることになる T・クリシュナマチャリヤの弟子だった。当時インドはまだイギリス統治下であり、マハラジャ達がまだ州の長としての特権を保持していた。マハラジャ達の威光や壮麗さは当時まだ現実のものであり、愛する郷土の伝統を継承し保護することは、外国の統治下でありながらも彼らの最重要事項とされていた。マイソール州のマハラジャ、クリシュナラジェンドラ・ヴォデヤルは特に古代のサンスクリット語テキストの保護と研究に尽力し、伝統的なアートや音楽そしてヨガに愛情を注いだことで知られている。重要な伝統祭礼ドゥッセラーを盛大に行うなど、古くからの伝統儀礼や生活様式を概ね維持しながら、マイソールの住人は清潔で便利な町で日々を暮らしていた。このような雰囲気の中、若い2人は当時マハラジャの庇護の下にいたクリシュナマチャリヤからヨガを学んでいたのである。

パッタビ・ジョイスはマイソールに残る運命にあったが、クリシュナマチャリヤは1954年にマドラス(現在のチェンナイ)へと移って行った。そしてスンドラージャ・アイアンガーは「そこでヨガを指導するように」という師の命令以外ほとんど何も持たず、1934年インドの中央部プーネへと送られたのだった。アイアンガーはプーネに留まり指導と修練を続け、マイソールに残ったパッタビ・ジョイスはサンスクリット大学へと通いながら修練を続け、その後そこで指導にあたることとなった。そしてこの兄弟弟子達は1940年まで再び会うことが無かった。2人ともその再会についてはあまり覚えていないようだが、それがクリシュナマチャリヤのヨガ・プロモーション・ツアーの最中であったことは記憶していた。クリシュナマチャリヤがパッタビ・ジョイスと共に、プーネにあるスワミ・クヴァラヤナンダが主宰するカイヴァリヤダーマ・ヨーガ・インスティテュートを訪れた際、短期間だがアイアンガーの家に滞在したのである。

そして歳月が過ぎ、何千年もの数え切れない年月をインドでひっそりと受け継がれてきたヨガが、1960~70年代頃の初期の探求者マダム・ブラヴァツキーやヴィヴェーカナンダ等の発言をきっかけに、野火のような勢いで世界中に広まり始めた。それにつれパッタビ・ジョイスとアイアンガーも、徐々にヨガ実践者の中で高名な存在になったが、1940年に共にコーヒーを飲んで以降、2人が再び会う機会は巡って来なかった。



そして2005年、2人が最後に会ってから65年後、アイアンガーが87歳になりパッタビ・ジョイスが90歳の誕生日を迎えた直後、私達の時代のヨガに最も影響を与えた二人は、ついに再会を果たすこととなった。歴史的な訪問はこんな会話で幕を開けた。

「もしもし?」「パッタビかい? スンドラージャだよ!」

2人はそれぞれ彼らの生徒達からは指導者として畏怖される存在だが、電話の会話はまるで兄弟のようで、そこには親しみの雰囲気だけが溢れていた。

再会にはぎやかなものとなった(アレキサンダー・メディンのコーディネートで実現)。アイアンガーはゲストとして招聘されていたタムクルでのヨガフェスティバルから、車で4時間をかけてやって来た。フェスティバルの当日は、スピリチュアル・リーダーが生徒達に呼びかけを行う日とされている「グル・プールニマー」だった。フェスティバルでその呼びかけの勤めを果たすため、アイアンガーはパッタビ・ジョイス90歳の誕生祭へは参加することが出来なかった。しかしタムクルからゴクラムまではそれ程遠くないため、その後の車での訪問が実現したのだった。6人の生徒と秘書のラゲーとともに、アイアンガーは午後1時頃ゴクラムに到着した。2人のヨガマスターが抱き合いカンナダ語でにぎやかに話始めると、居合わせた人々の顔に笑顔が広がった。カルナタカ出身(カルナタカではカンナダ語がもっとも話されている言語)のアイアンガーの生徒の1人は、「グルジはいつも『カンナダ語はよく解らない』と私にはおっしゃっていたのですが。見てください！流暢にお話されてます！」と話した。

まず全員にコーヒーが振舞われ、その後隣の部屋へ場所を変えると、1940年以来はじめて2人は食事をともにした。この再会のために、パッタビ・ジョイスの娘サラスヴァティに特別な食事を用意していた。食事の後 AYRI(現 KPJAYI) 共同ディレクターである孫のシャラートが全員を階下のヨガ・シャラへと案内すると、アイアンガーの生徒マダーヴァが質問を始めた。



マダーヴァ(以下 M)「ヨガを学び始めた当初、ヨガがこのように広まると思われていましたか？」

パッタビ・ジョイス(以下 KPJ)「全然。全くだよ。少年の頃にクリシュナマチャリヤ師がヨガのデモンストレーションを行ったのを見て、それらのポーズに魅了されてしまった私は、翌日クリシュナマチャリヤ師を訪れると、彼の前にひれ伏して生徒として連れていってくれるよう懇願した。するとクリシュナマチャリヤ師はぶっきらぼうに私が誰かと聞いた。とても怖かったよ。そしてどこから来たのか、父親は誰なのかと聞かれた。私は5マイル先のコウシカの村からやって来たこと、私の父は占星術師で司祭であることを話した。するとすぐにクラスに出るようにと言われたので、私は頷いて『はい』と答えた。翌日からクラスに出席し始めて、その初日からすぐに引っ叩かれ始めたよ(大笑)」

M「何故やめてしまわなかったのですか？」

KPJ「何故？学びたいという大きな情熱があったからだね。」

M「もし私があなただったら、とっくに逃げ出していたと思います。」

KPJ「そうかな？さっき言ったとおり本当に『学びたい』と思っていたんだよ。ガルーダとハッサン・ランガスワミーという2人の友人を覚えている。私達はみんなで学んだ。(アイアンガーに向かって)ガルーダを覚えてるかい？」

B.K.S.Iyengar(以下 BKS)「もちろん覚えてるよ。」

KPJ「1932年にマイソールのマハラジャが、自分のもとで指導をするようクリシュナマチャリヤ師を招いた。師はジャガン・モハン・パレスの近くにヨガ・シャラを開き、私達はそこで練習をしていた。教育部の責任者が…彼の名前を忘れてしまったな…何という名だったか…N.S スツバラオだ！彼はクリシュナマチャリヤ師の給料計算など、全てを担当していた人で、その頃はヨガを教えて広めるよう、いろいろな地方の役所などに師を派遣していた。1932年にクリシュナマチャリヤ師がサンスクリット・パタシャラ(大学)に再び来た時、師の前に進み出て礼拝すると『おお、君じゃないか！』と言われたので、『そうですグルジ。私です。ここで勉強しているんです』と答えた。嬉しそうだったよ。そしてまた師のもとで学ぶ機会を得た。私と私の友達のマハデヴ・バートは時々パレスに招かれて、ヨガのデモンストレーションを行った。ある時お礼に5ルピーとハヌマーン・カッチャ(下着)をいただいた。とても嬉しかったよ。(アイアンガーに向かって)ところであの女性のことは覚えてるかな？アメリカから来たインドラ・デヴィ？彼女もパレスのヨガ・シャラにプラクティスに来ていた。」



BKS「うん、うん、覚えている。彼女がインドラ・デヴィと名乗るようになったのは、ずっと後のことじゃなかったかな。」

KPJ「最近亡くなったと聞いたけど…」

BKS「ブラジルで。」

KPJ「そうかブラジルで。一つのことが次々に繋がっていくね。我々はそこで練習をしていた。マハデヴ・バート、シュリニヴァス・アチャール、ランガナート・デシカチャー、他にもたくさん。」

BKS「そう。全員覚えているよ。」

M「今では5ルピーよりもっとたくさんのお金を得ようになられましたけど、あなたにとってマハラジャから渡された5ルピーは、さぞ特別だったのではないかと思います。どちらにより価値があるとお考えになりますか？その5ルピーと、現在得られている収入と」

KPJ「そうだね、その5ルピーは本当に本当に特別なものだった。そのお札はトランクの中に、衣類の束の下にしまっておいた。毎日トランクを開けてそれを取り出して眺めては、また衣類の下にしまっていたものだよ(笑)。私はそれまで1ルピー札を見たことが無かったんだからね(笑)！その頃はそういう生活だったんだよ。」



こうして現代の伝説2人は、素晴らしい昼食とカジュアルな思い出話、そして写真撮影を行うと再び階上に上がった。その後午後のコーヒータイムが始まり、会話は自然とコーヒーについてのものとなった。アイアンガーによれば、コーヒーはこの暗黒の時代「カリ・ユガ」の「ソーマ・ラサ」＝「反道徳的な中毒性の液体」である。「まさにそうだ。それに最近では、さまざまなブランドの『ソーマ・ラサ』をお店で手に入れることができるね！」とパッタビ・ジョイスが笑った。

午後の時間は飛ぶように過ぎ、アイアンガーの出発の時間が近づくと、会話は再びクリシュナマチャリヤについてのものになった。

BKS「誰が何と言おうと我々の師の功績は確かなものだ。彼の知識は大海のようで、その知識の全てを我々が引き継いだとは言えないだろう。豊かな知識の持ち主だったが、ほんの少しをこちらに、今度はあちらに、というやり方だったから、私達は鶏がえさをついばむように、師の知識をあちらこちらから拾い上げなければいけなかった。そして私達はそれぞれに学び、その学びをそれぞれの形に育てあげた。だから皆さんへのアドバイスは、クリシュナマチャリヤ師の直弟子によって点された、消えない『灯り』を見つけるということ。そして、この彼の教えという『ヨガ・ディーパ（ヨガの灯り）』を絶やさないようにしなければいけないということだね。プラクティスを継続して、『灯り』を燃やして燃やして燃やしつづけることが大切だよ。」

KPJ「師は私達を日に焼かれた石の中庭に何時間も立たせ続けた。その時に、ヨガがどういうものか我々は理解し始めたんだよ！」

BKS「もう少し付け加えてもいいかな？100%額に汗しなければならない。身体だけではなく知的な面でも。そうして100%励んだ時にヨガというものが少し解るようになる。身体も100%頭も100%、全身全霊をかけなければならない。知識も同じことだよ。」

素晴らしい日に終わりが近づくにつれ、二人の偉大な人物が一つの場所にいるということ、その事実に対する感動と興奮を我々は静かに感じるとともに、心から感謝していた。ヨガの、いわゆる「流派」の違いについて批判を繰り返してきたこれまでの年月は、二人がコーヒーを共にした瞬間、意味を成さない雲や霧のように蒸発し消え去ったようだった。少なくともパッタビ・ジョイスとアイアンガーの2人にとって、お互いは久しぶりに再会したヨガの兄弟弟子にすぎない。アイアンガーが言うように。「1934年に出会い、2005年に再び出会った。私はこれを本当に稀な榮譽だと思う。」

実践方法の違い、スタイルの違い、哲学や意見の違いは常に存在し、しかしそれは些細な問題でしかない。互いに尊重しあい友情を築くことこそがインドの伝統であり、人々から多大な敬愛を受ける二人の底流であった。

